奈良県立商科大学「研究季報」第11巻 第3号（2001年1月10日）

〔翻　訳〕

演出されたオーセンティシティ
—観光状況における社会空間の編成—[1)]

ディーン・マッカネル
遠藤　英樹（訳）

Talcott Parsonsの著作（1937、1964）におけるテーマは、信念・行為・社会構造に関する社会科学的理解を統合する必要性について主張することにある。Parsons自身の理論体系もこうした統合に成功していないではないかとの意見が、1950年代終わりまで大勢を占めていた（Gouldner [1970] やFriedrichs [1970] の議論を参照)。しかし、こうしたことはParsonsの全体的な目論見からすれば、重要なことではない。彼は、私たちに対して明確に限定された問題を残したのである。1960年代には、Berger and Luckmann (1966)、Erving Goffman、Harold Garfinkel (1967)、その他の人たちが、社会構造を行動や信念の構造につなげていく努力をはじめたのだ。1970年代今日、私たちは、以前よりも有効で洗練された概念を手にいれており、それらを用いて、特定の社会状況下で社会構造と信念との関係を考察できるようになっている。

本稿は、観光に関する私の研究成果の一部である。本稿をより発展させた著作をいま、準備中であるが[2)]、そこでの中心的な知見は、観光が一種、社会の儀礼的側面を形成しているということ、それゆえ、観光が現代社会において宗教的な社会機能をになっているということである。本稿において分析されている社会生活の局面は、オーセンティシティ[3)]である。もっと正確に言うならば、経験のオーセンティシティの追求である。あさはかな自己の《生》、オーセンティックではない自己の経験を現代人たちが気にとめること、これは未開社会において聖なるものを気にとめることとパラレルなのだ。おのおのは、社会の構造的連帯に貢献している。未開の人たちの連帯は、各人すべてが自己の場所にとどまることによって達成される。さらに、こうしたことは、贈与交換や配偶者選択といった機能的に重要な個々人の行動に聖性を付与することで保証されるのだ。未開の人たちは、自分たちの儀礼のオーセンティシティについて思いなやむ必要などない。自分たちの社会がいまも滅びないで残っていること、これが悪に対して善が、また虚偽に対して真実が打ち勝つことの証明となっているのだ。これとは対照的に、現代社会においては、個人のモラルは社会の連帯に対して直接に結びついているわけではない。機能的に重要な関係性は、官僚

制やコミュニティや他の複合組織の中にある。こうした現代の状況下において、社会における「個」の位置づけは、彼らの社会的経験のオーセンティシティに対する新たに制度化された関心によって維持される場合があるのだ。

私は以下で、オーセンティシティの問題を考察しようと思うが、その際には Erving Goffman が構造と意識を架橋したやり方を用いるつもりである。私は、彼の考え方をより拡張して、彼の研究とは異なる分野に適用しようと考えている。

社会空間と信念の構造化

常識的区分とパラレルに、Goffman は社会制度の構造的区分を「表舞台」と「舞台裏」に分けている。表舞台は、ホストとゲストが、あるいは顧客とサービス提供者がであう場所である。舞台裏は、内輪のメンバーが出番までリラックスしたり準備をしたりする場所である。舞台裏となるのは、たとえばキッチン、ボイラールーム、専用トイレであり、表舞台は受付、客間などである。建物を見ても、こうした区分に沿うように造られていることが分かるが、しかし、その区分は主として社会的なものである。それは、ある場所で演出される社会的パフォーマンス、さらには、その際の社会的役割を基盤としているのだ。Goffman 自身は次のように述べている。「あるパフォーマンスが行われたとして、我々は、3つの重要な役割を各機能にもとづいて区分することができる。それは、パフォーマンスを行なう者、パフォーマンスを見る者、パフォーマンスを行なうのでも見るのでもない部外者である。この3つの重要な役割は、役割遂行者がどの領域に関わっているのかにもとづいている。パフォーマンスを行なう者は、表舞台にも舞台裏にも姿を見せる。観客は表舞台だけを知っている。部外者は、どちらの領域からも除外されている」[4)] (1959、pp.144-45)。Goffman によれば、自明なリアリティを持つようにみえる社会的パフォーマンスは、実は人間行動に関する非常にプロブレマティークな事柄なのである。そのリアリティは、表舞台と舞台裏の区分といった構造的編成に依拠するものなのだ。舞台裏は、観客や部外者には閉ざされており、表舞台のパフォーマンスを台なしにしてしまうような小道具や活動を隠蔽する。換言するならば、確固とした社会的リアリティがあるという感覚には、何らかの神秘化が要求されているのである。

神秘化によって維持される社会的リアリティというのは、「偽り」の現実かもしれない。だが同時に、興味深いことに、そういった神秘化こそが「リアルな」現実感を生みだすことがあるのだ。未開社会から現代社会へと移行していくにしたがって、社会構造は表舞台と舞台裏を区分する。そうなると真実は、もはや自明のことではなくなる。それはつねに、声高に真実らしさをアピールしなければならなくなる。

その例として、化学薬品がハムに注入されていることがあげられよう。それは、ハムをよりピンク色で食欲をそそるものに、よりハムらしくするためになされている (Minz 1971)。またサンフランシスコのノースビーチにいる女の子たちの中には、自分のバストにシリコンを入れている者もいる。これによって彼女たちは、理想のバストに近づけるため、大きさ・形・かたさをととのえているのだ。さらに文化の場

面では、小説家のことを描いた小説、テレビスターのことを描いたテレビ番組の例もある。これらにおいて維持されている一種の真実らしさは、ほとんどが虚構を含んでいるのだ。

神秘化には、ハムやバストの例のように、個人が意識的に社会的外観を装う場合もあるし、意識的かつ個人的レベルでない場合もある。社会構造そのものが、社会的リアリティを支える神秘化を創りだすことに関わっているのだ。

人目を避けた行動は、舞台裏で行われる。見知らぬ者が舞台裏に入り込んでくるのは、日常生活の大きな社会的事件である。人々は、侵入を受けた側に対してばかりではなく、侵入してきた見知らぬ者に対しても関心をいだく。人々は、この種の侵入が起きないように願っているが、それは一つのパラドックスである。見知らぬ者との社会関係がなければ、舞台裏などなくなってしまうし、舞台裏がなければ、そこでの秘密は部外者や偶然の侵入者にとって重要ではなくなるであろう。まさに舞台裏があるがゆえに、そこには目にする以上の何かがあるとの信念が生じるのだ。たとえ実際には秘密などなくても、舞台裏には何かがあるといった気になる。民俗学者は、屋根裏や地下にまつわる怪談を発見し、こうした信念に根拠を与えているのである。

舞台裏・親密性・社会的連帯

舞台裏があり、そこに侵入する者がいるかもしれないということ、このことによって社会生活は、親密で「リアルな」ことと、「見せかけ」にすぎないことに分かたれる。このように社会を表舞台と舞台裏に区分することで支えられている信念は、真実というものを親密性に関連させて考えることに結びついている。私たちの社会では、親密性は非常に重要視され、社会的連帯の核だと見なされているが、ある場合には社会関係の合理性や広がりよりも重要で「リアル」なものだとも考えられている。「やつらの一人」であること、「やつら」と共にいること、これが「やつら」と舞台裏を共有できるということであり、これによって人々は、他者たちの単なるパフォーマンスの背後に、彼らの本当の姿を見ることができるようになるのだ。

観光経験は、ここで描写されているような構造上の傾向を有している。観光客たちは、本当の《生》を見たいと思っているし、現地の人と親しくなりたいとさえ思っている。だが同時に、彼らは、そうした目標に到達できていないと批判される。「ツーリスト」という言葉は、オーセンティックではない経験ばかりしている人たちに対する嘲笑的なラベルとして次第に用いられるようになっているのだ。

しかしツーリストにとって理想とされるのは、何らかの社会や他者のある面をオーセンティックかつ脱神秘化して経験することである。あるアングラ雑誌に文章を寄せている一人の匿名ライターは、ウーマンリブ運動において女性だけでダンスをした時の感想を書いている。その時、彼女は、いつも男性の前で維持している表舞台の自分から解放されたと書いている。

「ついに男たちは去っていった。私たちは踊ったのだ－私たち女性だけで。輪になりラインをつくり、手をつなぎ、腕を組み、手をたたき、飛び跳ねて－皆が一つになった。私だって他にたくさんのダンスを知っている。そこではカップルができ、男と女が話しもせず見つめあい座っているだけ。どうして私が、そんな馬鹿げた、独占欲と嫉妬が渦巻く中でペアをつくることに心をくだかなければいけないのだろう？たくさんのエネルギーと《生》、そして快感を私たち女性は充分に表現してこなかった。でも、あの土曜日はべつだった。そこにいた女性たちは演技や競争をやめ、一緒に楽しく過ごし歌い踊った。そう、私たちは、お互いのためだけに踊ったのだ」(Anon.,no date,p.33)。

真実、親密性、《生》の共有、これらの関係については、民族誌のデータ収集法に関する記述においても見ることができる。Margaret Mead は次のように書いている。「人類学者は現地でサゴ椰子を常食としていることについて、記録するだけでは充分ではない。少なくとも実際に食べてみて、サゴ椰子がどれほど腹持ちがいいのかを知らなければならない。また赤ちゃんが手をぎゅっと首にまきつける姿を、文字や写真で記録するだけでなく、実際に赤ちゃんを抱いてみて、自分の首がしめつけられるのを経験してみなければならない。祭りには急いで行ったり遅れていったりし、祖先の霊が語りかけてきたり、神様が現れてくるのを拒んだりする時には、芳香のもとで目眩がするほどに跪かなければならない。人類学者は状況の中へと入り込み、観察をするのだ」[5] (Mead 1955,p.31)。これらの人たちは、偽りの表舞台と親密なリアリティとの明白な区分について言及している。それは、彼らにとって、疑う余地のない区分なのだ。すなわち彼らにとっては、観察者がステージを離れて「状況」の中に入るやいなや、リアルな真実がいくぶん自動的に姿を現すのである。

だが、こうした事柄をもう少し詳しく見てみると、他者やその社会の真の内側に入り込んでいくことは、それほど簡単でないと分かる。実際、リアルだと思っていたものが、リアリティの構造を基礎とした見せかけであったりするのだ。例えば Goffman も、ある状況下では表舞台と舞台裏を分けることが難しく、表舞台が舞台裏に、舞台裏が表舞台に変わりうると述べている。

「かつて舞台裏を備えていた台所が、いまや最も人目に見せられないところになるとともに、最も人目に見せたい場所にもなっている。また私たちは、工場・船内・レストラン・家庭などが舞台裏をきれいに整頓するようになっている社会の動向を観察することもできる。それは、まさしく修道僧や共産党員やドイツの参事会員のごとく、その監視員たちがつねに見通せ、その視界をさえぎるものがないほどであるが同時に、オーディエンスは社会的イドを持ちつつ、そのきれいにされた場所を穿鑿してまわるのである。交響楽団のリハーサルを入場料をはらって聞くのも、最近の例の一つにすぎない」(1959、p.247)。

Goffman がここで述べている状況下では、単なる演技と本当のオーセンティックな表現を容易に区別

することができなくなっている。私が考察しようと思っているツーリストの場合、問題はさらに複雑である。

観光状況におけるオーセンティシティ

Everett C. Hughes が私に書簡で示唆してくれたように、旅は本来、宗教的な巡礼だった。この2つの関係は、単に形がにているというにはとどまらない。その動機もにている。両者はどちらも、オーセンティックな経験を探求するものである。巡礼者たちは、宗教的に重要な出来事のあった場所を訪ねていく。それに対してツーリストたちは、社会的・歴史的・文化的に重要な場所にでかける。

ただ注意していくべきなのだが、必ずしもすべてのツーリストたちが舞台裏を社会的に重要な場所だと見なしているわけではない。ある場合、ある訪問客にとっては、舞台裏は不要で余分なものとなる。例えば Arthur Young は、農業の比較研究を行なうべく、1787年にフランスへ渡ったのだが、その際、彼は次のように述べている。

「モップやほうきやたわしは、フランスの旅館にありはしない。ベルだってないのだ。いつも大声をだして娘を呼ばなければならないのである。その娘が顔をだしたところで、こぎれいでもないし身なりもよくないし、ましてや美しくもありはしない。台所は煤で真っ黒。主人はいつもコック役をするが、ただし料理するところを見ていなければ食欲もでるだろうといった代物だ。女主人は商売にとりたてて必要ないと思ってか、客に丁寧な言葉も使わないし注意も払わない。」(Young 1910、p.332)。

今日の、とくにアメリカのツーリストたちの中には、Young が正確な事実を述べていると思ったとしても、彼の態度が心ないもので皮肉っぽいと考えるものがいるだろう。Young の記述において人が大きな関心を抱くのはむしろ、Young が見たくて見たわけではない事柄に対してである。

ツーリストたちは訪問地における真の《生》を分かち合いたいと思っているし、少なくとも真の《生》を見たいと思っている。こうしたツーリストたちの願望は、小さなスペインの街を訪れた際に、あるツーリストが書いた報告の結びによく表れている。「フリヒリアナは、グラナダのアルハンブラ宮殿やネルハの洞窟のように特徴あるスペクタクルに満ちた観光地というわけではない。フリヒリアナの魅力は、その雰囲気にある。それは趣きがあるが、飽きさせることがなく表層的でもない。それは生きている村であり、『オーセンティックなスペインの街を復元したもの』ではない。ここに来れば、アンダルシア風の生活スタイルをより理解することができる」(Pearson 1969、p.29)。こういう感情を俗に表現するとすれば、『舗装された道をはずれ』、『ありのままを行こう』ということになる。ある航空会社の広告には、次のように書かれている。「『回り道』して行こう。スイスの自由気ままな15日間。休みをとってゆっくり過ごしましょう。スイスの一味ちがった見晴らしのいい思いもかけない、そんな所に回り道してみませんか。たった$315たらずです。...クルマつき。回り道しようよ」(Advertisement 1970、p.42)。

ツーリストたちの中には、彼らの訪問先である社会の生活に入り込んだり、その舞台裏をのぞくことができるものもいる。1963年には、カリフォルニア大学バークレー校において学生センターの責任者が何度か訪問客たちをビルの中へと招待している。訪問客たちにとって、それは、学生センターのキッチン、ボーリング台の裏側、屋根にとりつけられた巨大な送風ファンなどを見るチャンスであった。多分、この責任者はとりわけて模範的なビル責任者であったわけではないであろう。この種のもてなしは、文明化されてひさしい地域では例外的なことではなく通例のことなのだ。それが英国やアメリカを含む、この地域が親しまれやすい要因であると思われる。また知人の一人が私に、こんな話しをしてくれたことがある。ある時、彼女はダマスカスのバザーの布商人から、彼の絹工場へ来いと招待を受け、『OK』の返事をした。そこで布商人が売り場の後ろにあったドアを即座に開けたのだが、すると、そこに小さくて暗い部屋がでてきたのである。その部屋では、シャツを着た二人の男が床に向かいあって座り、手織り機を相手の方へ動かしてあっていたのである。「こういうことなんで、一反の絹を織り上げるのに一年かかるわけさ」と布商人はドアを再び閉めながら説明したということだ。この種の出来事、日常的な意味での「経験」は、時折、偶然おきることがある。これは私の親戚の女性が語ってくれた話しだ。彼女と友だちが二人で、バンフの近くのカナディアン・ロッキーへ行った時のこと、彼女たちはあまりにも遠くへ来すぎて町へ昼間の内に戻れなくなってしまった。結局、彼女たちは貨物列車の乗組員に助けてもらったわけだが、その際、列車の機関室で機関士と一緒にいさせてもらえたことが、彼女たちの一番の思い出になっている。さらに若いアメリカ人夫婦が私に語ってくれた話しもある。彼らは、ユーゴスラビアのザグレブでホテルを見つけることができなくなってしまった。そこで、歩道でどうするべきかを話し合っていたところ、一人の老女が近づいてきたというのだ。彼女は曲がりくねった道を通って、彼ら2人を小さなアパートメントにつれていき、居間のカーテンとしてつるされていた毛布の後ろの長椅子で寝ていた労働者の家族を追いだし、その部屋を闇取引で貸してくれたのである。

社会の舞台裏にいたる観光の扉は、いたるところにある。「個人旅行」と言われるものは、こうした観光の扉に向かおうとして生まれたものである。ツーリストたちの中には、常に観光の扉を探し求め、開けようとしている者もある。彼らは『冒険心』がある人たちだと言われている。ここにカリブ海に行ってきた人の報告があるが、これを見ると、冒険の醍醐味が感じられるであろう。「『ツーリストは郵便船なんかに決して乗ろうとしない』とホテルのマネージャーが言った。これで、僕の心は決まったようなものだった。次の日の午後、僕はナッソーの下町にあるポッターズ・ケイの港からデボラK号のさびついた甲板の上に飛び乗った。…[これを書いた人は、郵便船で行った島のことを描写し、それで報告を終えている。]次の日、バハマ航空で飛行機に乗っていると、デボラK号がグリーン・タートル・ケイへと静かに向かって進んでいるのが見えた。あの船はすごく揺れて、気分が悪くなるし、多くの人が必要と思う快適さなんてほとんどありはしない。でも郵便船に乗ると、バハマの本当の生活をすごく安く見ることができる。ツーリストとしてではなく…」(Keller 1970、p.24)。こうした経験が存在するということは、それを生みだす

社会の構造的編成があると考えてもおかしくはないだろう。

観光状況における演出されたオーセンティシティ

社会的施設のガイドツアーを行なう一般的な理由としては、ツアーを行なうことによって普段は閉じられている施設のエリアに部外者も近づけるようになるということをあげられよう。例えば消防署、銀行、新聞社、酪農場をめぐる学童たちのツアーがある。これは、いわゆる「教育的」なツアーである。これら重要な場所の内側が、ツアーのコースに沿って紹介されていくのだ。この種のツアーや、それによって生みだされる経験は、興味深い分析上の問題を提供してくれる。そのツアーは、ある場所の内側をあらわにしようとする社会的組織によって特徴づけられる。ツアーにおいては、部外者は常連の人々よりも中に入りこむことができる。子どもたちは、銀行の金庫室に入ったり、たくさんの札束を見たり、牛のお乳に触ったりできるのだ。同時にそこでは、ある種の演出がなされており、それが彼らを表層的なものに導いていくのである。ただツーリストたちは、そういった表層的なものに必ずしも気づいてはいない。彼らは通常、このことについては目をつぶっているのだ。ケープ・ケネディからの報告には、次のような記述がある。

「ケネディ・スペース・センターを訪れた観光客のうち、アポロ13号のあの忘れがたい宇宙計画があった先月に、その施設を見に行った人ほどドラマティックなことを経験した人はいないだろう。ケネディ・スペース・センターを訪れたツーリスト一行は、大きなガラス窓越しに通信員が働いているところを見たのである。訪問客たちはまた、宇宙管制センターの声も聞くことができた。ある一人の背の高い若者が、ミニスカートをはいたガールフレンドを抱き寄せて言った言葉に、観光客たちの気持ちが集約されている。彼は少し声を大きくして、こう言ったのである。『ここにいると、彼らと一緒にやってるという気持ちになるよ』。『ああ神様。彼らを安全に帰らせてあげてね』と彼のガールフレンドは真剣につぶやいたものだ」(Gordon 1970、no page)。

この報告の若者は、自分がオーセンティックな経験をしているという信念を表現している。この種の経験は、私たちの社会のいたるところで切りひらかれつつある新たな社会空間を通じて生みだされたものである。その空間においては、部外者も商業・家庭・工業・官庁などの分野の内側を詳細な点まで目にできるのだ。明らかに、こうした空間の中へ入っていくことによって大人たちも、顔をガラス窓に押しつけて、瑞々しい感動を味わえるような発見をしたり、子どものような感情を抱くこともできるのである。またここで注意しておくべきなのだが、革新サイドであれ保守サイドであれ一部の人によって、社会の道徳的基準が一般にゆるんでいる証拠として挙げられることがら（例えば「フリーセックス」など）は、ほんの一部の特殊な現実にすぎないのであり、人々の興奮は社会的連帯においてこそ高まるのである。

演出された親密性に関する、もう一つの基本的な例としては、レストランが食事場所以上のものになっ

ていることが挙げられるだろう。

「コペンハーゲンの新しい食事場所として、とあるレストランがある。その店は、市のメイン通りであるストロイエに位置している。近頃、人々は窓に顔をおしつけて4人のコックを見ている。...建物の奥にある快適な木目調のレストランに入っていくには、キッチンを通らなくてはならない。急いでいる場合は、キッチンにいてファーストフード形式で食べてもかまわない。『そのキッチン』は、ちょっと実際、魅力的であり、カナダ生まれでスイスで修行をつんだ Patrick MaCurdy が料理長をしており副支配人も兼ねている。『偶然通りがかった人は、コックたちがステーキやチキンやサラダを料理しながら働いているところを見て、惹きつけられるのである』」(Sjoby 1971、p.5)。

ツーリストたちが目にするのは、Goffman が言う制度的な『舞台裏』ではない。むしろ、それは演出された舞台裏、一種の生きた博物館なのだ。私たちは、これまで、これらについて分析可能な概念を考えてこなかったのである。

観光状況の構造

私の学生が教えてくれたことだが、ニューヨーク市のある新しいアパートメントでは、ヒーターや空調設備が明るい原色でぬられたうえ、ロビーに飾られているそうだ。このように顕わにされる社会制度の点からすると、そのレセプションルームの構造は、制度的レベルで真実やモラルに対する新たな関わり方を反映している。例えば産業界では、誠実で正直に見せかける方が有利だと分かってきているが、それは誠実な見かけをほとんど考慮しない場合にこうむる不利益にまさるものである。こうした現象とパラレルなのが工業先進国にいる西洋の若者たちだ。彼らは服装において、シンプルでナチュラルであることを印象づけようとしており、ナチュラルに見える服装、ジュエリー、ヘアスタイルを選択するべきだと思っている。この点からすれば、厳密に言うとヒッピーは運動ではなく、現代工業社会の一つのあり方なのである。

工業社会の構造的展開は、観光空間がいたるところに現れている点に見いだすことができる。この空間は、舞台セットであり観光のセット、つまりはツーリストのためにうまくディスプレイされたセットなのである。ニューヨークの株式取引所は見物客に供されており、一つの観光のセットとなっている。カリフォルニアのディズニーランドの世界では、見物客のためだけに舞台裏を展示しているが、しかしながら、それはまさしく「舞台セット」としてだ。このように見てくると、観光のセットである特徴とは以下のようなものとなろう：そこを訪問するのに必要な理由は唯一、そこを見物するということである。この点で、これらは社会空間の中でもユニークなものである；それらセットは、シリアスな社会的活動に物理的に隣接している。あるいはシリアスな活動は観光セットによって模倣されている；それらセットの中には、特定の、時に深遠な、社会的かつ職業ごと、産業ごとで用いられる道具や機械が含まれている；そこは、少

なくとも部外者の訪問に供される特定の期間内にはオープンである。

ツーリストたちは、オーセンティックな経験に対する願望によって駆りたてられており、実際自分たちが、そうした経験をしていると信じている。しかし、この経験が果たしてオーセンティックなものかどうかは、結局のところ確かめられはしないのだ。舞台裏に入ったと思っていたのに、実はそこは、ツーリストたちが訪問しても良いように完璧にセットが組まれた表舞台だったりする。特に近代社会における観光の状況で、表舞台と舞台裏を区別する重要性、またはそれら区別そのものさえも、観光経験の理念的な両極として以外なら、あまり考えられないかもしれない。

Goffmann の front-back 概念に戻って言うならば、表舞台に始まり舞台裏に終わる一連の過程として観光状況をとらえることができるだろう。各段階を区別する経験的な指標を見出すことは困難であるものの、理論的には以下 6 つの段階に分けることが可能である。

第 1 段階：Goffmann の言う表舞台。ツーリストたちが乗り越えたいと思っている社会空間。
第 2 段階：舞台裏のごとく飾り立てられている観光の表舞台。例えば、壁に魚をとる網をかけたシーフードレストラン、壁にチーズやボローニャソーセージのレプリカをかけたスーパーマーケットの肉屋などがそうである。機能的に言うと、この第 2 段階はまったく表舞台に属するものである。それは舞台裏らしく飾り立てられているが、それらは本当のものではなく、単に「雰囲気」にすぎない。
第 3 段階：舞台裏のごとく完璧なまでに、しつらえられた表舞台。例えばテレビでの月面歩行のシミュレーションや、ベルリンのセックスショップのライブショーなどがそうである。こうしたシミュレーションがうまくなされればなされるほど、第4段階との区別がつきにくくなる。その意味で、これはプロブレマティークな段階であると言えよう。
第 4 段階：部外者にもオープンな舞台裏。例えば有名人のプライベートを雑誌がすっぱ抜いたり、秘密裏に進められている外交交渉の詳細を暴露したりするというのが、そうである。これらの観光状況（第 3 段階と第 4 段階）を他の舞台裏から区別するのは、このオープンさなのである。観光の対象とはならない舞台裏というものはほとんどが、いくらか入場が制限されているものなのだ。
第 5 段階：ツーリストが時折、のぞいてもかまわないように整頓され、ちょっとばかり変えられている舞台裏。例えば Erving Goffman が言うところのキッチン、工場、船内、交響楽団のリハーサル風景がそうであり、ニュースのリークも同様である。
第 6 段階：Goffman が言う舞台裏。ツーリストたちを駆り立ててやまない社会空間。

理論的には、以上 6 つのものが考えられよう。ただ観光状況においては実際のところ、舞台裏のごとく飾り立てられた領域（第 2 段階）から、ツーリストたちがのぞける舞台裏（第 5 段階）までに主として限られるだろう。「見聞（Insight：中を－見ること）」という言葉を見てもまさに、これは日常的な意味でも、

いくらかはエスノロジカルな意味でも、舞台裏をこのようにのぞき見るというところからきているのである。

ツーリストと知識人

彼らツーリストたちは訪問先で、重要な役割や機能的な役割といったものを何ら担わない。訪問先で何が起きようとも、彼らにはまったく責任がない。そのため観光経験で獲得しうる見聞の中身など、表層的なものにすぎないという批判がくわえられてきた。David Riesman の「他人志向型」人間（1950）や Herbert Marcuse の「一元的」人間（1964）といったものは、大衆産業社会において知が表層的になっていることに対し、伝統的知識人たちが憂慮した結果、考えだされたものである。とにかく観光状況それ自体、知識人たちの批評を喚起しつつあると言えるだろう。観光状況は、リアルな《生》の単なるコピーあるいはレプリカといったものではなく、時に現実以上にリアルなコピーなのである。もちろん、このことは学問的に厳密な意味では－例えばエスノグラフィカルな意味では－、当てはまらない。観光は、フィールドワークに支えられた研究の代わりにはならないのである。知識人たちは、こうした信念を確固としてもっている。観光状況から生みだされる観光経験など、オーセンティックではありえないし、そういうものとして、それは慎重に行われた研究と比べものにならないくらい表層的なのだとされる。また、それは単なる経験と比べてみてもモラルの点で見劣りがすると考えられている。単なる経験も時には神秘化されているかもしれないが、観光経験は、常に神秘化されているからだ。観光経験に含まれている偽りは、見物客をリアリティに誘う装置として、真実に満ち溢れて呈示される。偽りの舞台裏は、偽りの表舞台以上に巧妙であり危険である。社会空間をオーセンティシティを交えないままに脱神秘化するということは、単なる偽りではなく、それ以上の真実をともなったものだと言えよう。

こういった考え方につらなるものとして、観光に関する Daniel Boorstin（1961、pp.77-117）の批評がある。そこでは現代における大衆のメンタリティが正確に分析されており、1950年代における個を中心とした概念から、構造を志向した概念へと転換がはかられている。「擬似イベント」という彼の概念も、近年のこうした傾向に位置づけることができるが、観光に関する彼の批評は、Veblen の「顕示的消費」（1950、pp.41-60）や、あるいは Mark Twain の風刺に満ちた評論『The Innocent Abroad』にまでさかのぼることができるものである。「擬似イベント」という言葉を用いることで、Boorstin は、観光状況の中に知的な意味で満足しがたい何かが含まれていることを強調しようとしている。彼は次のように述べている。「これら［観光における］『アトラクション』が提供するものは、巧妙にこしらえあげられた間接的経験であり、リアルなものが空気と同じように無料で手に入るところで、わざわざ金を払って買う人工的製品である。土地の人を『見物する』という行為自体が、旅行者を土地から隔離している。土地の人は隔離所に入れ、ツーリストはエアコン付きの快適な部屋から彼らを眺める。それは、世界中のどこの観光地でも今日見いだされる文化的蜃気楼である」[6]（Boorstin 1961、p.99）。この種の批評によって私たちは、他の領域と同じく観光状況もまた、真実や美に対する関心を保持していないことに思いいたるであろう。それら

は、みすぼらしいものなのだ。また同様に、観光地の中には、仰々しく飾り立てられ訪問客をびっくりさせてしまうものがあるといったことが挙げられよう。レストランは牧場風のキッチンのごとく飾り立てられ、ベルボーイは外国風のファーストネームを用いる。ホテルは田舎のコテージ風にしつらられられ、宗教儀式は一大ページェントのごとく演出される。この種の観光状況は、Boorstin が問題としたマスツーリズムの全体像からすれば多分、それほど重要ではないにしても、一つの理念型を形成する上で助けになるだろう。

Boorstin の考察は、観光の編成のされ方について深いところまで抉りだしている。しかし、彼は「擬似イベント」の概念を充分に分析することなく個人的批評にとどまっており、観光の構造分析へと展開していける可能性を開花させずに終わっている。彼は、ツーリストたちが「擬似イベント」を生みだしていると主張している。高速道路沿いのレストランを例にひき、彼は次のように述べている。「人々はその地方特有な、個性的な景色をながめなくても食事をすることができる。紙の皿敷きには、その地方特有の景色が何も描かれていなくて、他の『オアシス』の所在地が載っている番号のついた高速道路の地図が示されている。*高速道路を見下ろしながら、彼らは、自分たちもこれから、その中に入っていく自動車の流れを見ている時に、最もくつろぐのであって心が休まるのだ*」(Boorstin 1961、p.114；斜体文字は筆者による)。しかしながら、ツーリストの観察から私が収集したものの中には、ツーリストが表層的でわざとらしい経験を欲しているという Boorstin の主張を支持するものは何一つなかった。むしろツーリストたちは、Boorstin の言うところのオーセンティシティを望んでいるのだ。結局 Boorstin は、ツーリストと知識人を完全に分け隔ててしまおうと考えているのである。旅行（travel）と観光（tour）の違いについて、彼は次のように述べている。「トラベラーは仕事をしている人であり、ツーリストは楽しみを求める人である。トラベラーは能動的であって、人々との出会い・冒険・経験を一生懸命に捜し求める。ツーリストは受動的であって、おもしろいことが起きるのを待っている。ツーリストは『見物』に出かける。…彼は、あらゆることが自分のためになされるのを期待している」(Boorstin 1961、p.85)。すでに述べたように、Boorstin の主張はツーリストやトラベルライターの間でも共有されている。実際、それは広く流布しており、マスツーリズムの問題の一部となっているが、分析的な考察になっていない。

言い換えれば、私たちはいまだに「擬似イベント」の研究に関して、充分に厳密な視点を持っていないのである。そうした視点をかたちづくっていくには、観光という事実についての詳細な観察が必要になるだろう。本稿で引用されているライターたちは、自分たちの経験が時にはかないものであるという Boorstin 流の嘆きを述べているし、現地の人たちと親しくなりたいという願望を抱いている。だが、もっとここで大切なのは、彼らは訪問先のリアルな《生》に入っていけないと感じたときに、その失望感をすんなりと受容できるということである。実際、Boorstin 流の嘆きなど笑い飛ばしてしまうというようなツーリストもいる。タンジールへの旅行記を次に引用するが、その著者は、明らかに舞台裏が偽りであることに気づいており、しかもその状態にくつろいでさえいる。「若いアラブ人が私たちのテーブルに近寄っ

てきた。彼は絨毯を売ろうとしていた。でも私たちは興味がないと伝えた。なのに彼は自分の荷をほどいて、絨毯を地面に広げた。彼は去ろうという気はさらさらないようだった。私の位置からは、彼がローブの下に仕立ての良いブルーのスラックスとカシミアのセーターを着ているのが見えた」(Thompson 1970, p.3)。こうしたツーリストたちにとって、舞台裏があらわになるというのは、観光経験の思いがけない出来事なのだ。ツーリストたちが舞台裏で目にするのは、まさしく別のショーなのである。それは衝撃的でもないし、彼らを不安に陥れるものでもない。ツーリストたちは、自分たちが目にすることでピュアでなくなってしまったなどと感じはしないのである。

結論

サンフランシスコやスイスといった高度に発達した観光状況においては、あらゆる観光経験がショーの要素を持っており、はかないものとなっている。ツーリストたちはまさに、観光の領域へと入っていく。彼らの経験は、彼らにとって日常的なものではない。それに対して、彼らの訪問先に住む現地の人たちはツーリストのことなど考えず、普段の仕事に精をだしている。訪問先の本当の《生》に入り込もうと努力するときにのみ、ツーリストたちは親しくしているのだという感覚を持ち、「参加」していると言えるような経験をするのだ。しかし自分の《生》に「参加」するというような人間など、どこにもいないだろう。まさに私たちは他者の《生》にのみ、「参加」しうるのである。

ツーリストたちが観光空間に入り込むと、オーセンティシティを追求する限り、彼らに出口はなくなる。観光状況には他者がつきものであるが、他者は、その土地の《生》と文化のリアルなショーを見せてくれる。例えば、イスタンブールではヒルトンでさえ、トルコ文化のいくつかの要素は残している（ウェイトレスはハーレムのパンツをはいている。少なくとも1968年にはそうだった)。またヨーロッパの知人のうち何人かにとっては、アメリカのスーパーハイウェイは最も魅力的なアトラクションであった。それらは退屈なものであればあるだけ、よりアメリカ的だと考えられた。

Daniel Boorstin は、こういったことについて最初に研究したのだ。彼のアプローチにおいては、表舞台は虚偽で舞台裏が真実といった見解を基礎とした単純な社会的価値を有していた古き時代へのノスタルジアが、分析のレベルにまで高められている。こうした古い立場は道徳的に良いものなのかもしれないが、観光の科学的研究にまでいたるものではない。特に、Boorstin や他の知識人たちのアプローチでは、産業化のもとでツーリスト階級が台頭してきたこと、さらにツーリストの行動や社会構造の編成が世界的規模で展開されてきたことを充分に分析しえないのである。こうしたことは Boorstin 自身も指摘してはいるのに、彼は自分が提起した問題に向き合い、それをつきつめることなくむしろ、長年言われつづけてきたツーリストの態度、他のツーリストに対する明白な嫌悪感を表明しているにすぎない。すなわち、彼らはツーリストだが私は違うという態度である（知識人たちのアプローチに見られる、こうした側面のすぐれた議論については、Burgelin [1967,pp.66-69]を参照)。

Daniel Boorstin は、アメリカのスーパーハイウェイやイスタンブールのヒルトンを「擬似」的であるとした。「擬似」的と言われることで、それらは実体がなくはかないものであることが示唆されているのである。これに対して私は本稿で、Erving Goffman の front-back 概念に修正を加えることによって、同様の事実にアプローチしようとした。そこで特に私が言いたかったことは、表舞台と舞台裏は、一連の連続性の理念的な両極として考えられるべきだいうことである。

私はこれまで、社会空間の構造がツーリストの態度に深く関わっていると主張してきた。私はこうしたことについて、これからも追求したいと思っている。現地の人とツーリストたちが親しくなるには、オーセンティックな経験を求めていかなくてはならないが、そこには、表舞台から舞台裏までの一連が段階があるのだ。

【参考文献】

Advertisement for Swissair. 1970. *New York Times* (April 19) Section 10.

Anon. n.d. "Dear Mom and All Mothers" *Tiohero* 5:32－33. Ithaca,N.Y.:Glad Day Press.

Berger, P.,and T. Luckmann. 1966. *The Social Constrution of Reality*. Garden City,N.Y.: Doubleday.

Boorstin, D. J. 1961. *The Image: A Guide to pseudo-Events in America*. New York:Harper & Row.

Burgelin, O. 1967. "Le tourisme juge." Special edition, "Vacances et tourisme," of *Communications* 10:65－97.

Friedrichs, R. W. 1970. *A Sociology of Socilogy*. New York:Free Press.

Garfinkel, H. 1967. *Studies in Ethnomethodology*. Englewood Cliffs, N.J.: Prentice-Hall.

Goffman, E. 1959. *The Presentation of Self in Everyday Life*. Garden City, N.Y.: Doubkeday.

Goodman, J. 1970. "Hitting the 'Freebee' Jackpot without Trying-in Las Vegas." *New York Times* (January 25) :Section 10.

Gordon, I. H. 1970. "Space Center Is Open to Visitors Even in a Crisis." *New York Times* (May3): Section 10.

Gouldner, A. W. 1970. *The Coming Crisis of Western Sociology*. New York: Basic.

Keller, A. 1970. "He Said: 'Tourists Never Take the Mail Boat' -That Clinched It." *New York Times* (May 24): Section 10.

Marcuse, H. 1964. *One-dimensional Man*. Boston: Beacon.

Mead, M. 1955. *Male and Female*. New York: Mentor.

Minz, M. 1971. "Cancer Link Possible in Food Tinting." *International Herald Tribune* (n.d.)

Parsons, T. 1937. *The Structure of Social Action: A Study in Social Theory*. New York: McGraw-Hill.

——. 1964. *The Social System*. Glencoe: Free Press.

Pearson, E. 1969. "Discovering an Undiscovered Town in Southern Spain." *New York Times* (June 6): Section 10.

Riesman, D., R. Denny, and N. Glazer. 1950. *The Lonely Crowd*. New Haven, Conn.: Yale University Press.

Sjoby, J. 1971. "Dining Out: International Fare in Danish Restaurant." *International Herald Tribune* (February 26).

Thompson, B. 1970. "Hustled, Harried-But Happy." *New York Times* (August 16): Section 10.

Twain, M. 1966. *The Innocents Abroad: or The New Pilgrim's Progress*. New York: Signet Classics.

Veblen, T. (1934) 1953. *The Theory of the Leisure Class*. New York: Mentor.

Young, A. 1910. "Travels in France." In *The World's Greatest Books*, edited by Lord Northcliffe (Alfred Harmsworth) and S. S. McClure. Vol. 19. No location indicated: McKinlay, Stone & Mackenzie.

《訳注》

1） 本稿は、MacCannell, D. (1973). Staged Authenticity: Arrangements of Social Space in Tourist Settings. American Journal of Sociology 79(3). pp.589-603 を訳出したものである。日本語に訳すうえで一部、割愛した箇所もあるが、ほぼ全訳に近いものとなっている。MacCannellは、この論稿を著わしたときは米国テンプル大学（Temple University）に籍をおいていたが、その後、米国カリフォルニア大学デーヴィス校（University of California at Davis）に移っている。

2） この著作とは多分、MacCannell, D. (1976). The Tourists: A New Theory of the Leisure Class. New York: Schoken Books. だと思われる。本書は現在、観光研究の必読文献となっているが、残念なことにまだ日本語に訳されてはいない。日本語への訳出が切望される。さらに、MacCannell, D. (1992). Empty Meeting Grounds: The Tourist Papers. New York: Routledge. も観光研究の基本文献として訳出がのぞまれる。

3） オーセンティシティ（authenticity）とは「本来性」「本物性」といった意味であるが、多様な思想的な背景をもつ微妙な言葉であるため（その一例として、Trilling, Lionel. (1971). Sincerity and Authenticity. Cambridge: Harvard University Press. を参照)、あえて日本語に訳していない。

4） Goffman(1959)を引用した部分の訳については、石黒毅訳（1974)『行為と演技－日常生活におけ

る自己呈示－』東京：誠信書房を参照した。

5） Mead（1955）を引用した部分の訳については、田中寿美子・加藤秀俊訳（1961）『男性と女性－移りゆく世界における両性の研究－』東京：東京創元社を参照した。

6） Boorstin（1961）を引用した部分の訳については、星野郁美・後藤和彦訳（1964）『幻影の時代－マスコミが製造する現実－』東京：東京創元社を参照した。